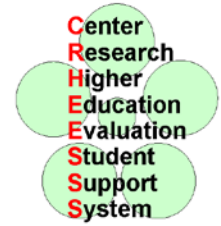


週刊センターニュース No.254



第254号（2009年4月13日）毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL：http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daiyou_rche/index.htm

〇〇〇「第2回教育効果とFDに関する教員アンケート」へのご協力をお願い 〇〇〇

標記に付きポータルで実施中です。教員の方々におかれましては、お忙しいとは存じますが、本学の教育力を高めるために必要なデータ作成につながりますので、ご協力のほど、よろしくお願い致します。締め切りは4月24日（金）です。

〇〇〇 発達障害（かもしれない）学生への支援 〇〇〇

4月2日（木）に第225回共同学習会「困った学生の子どもの頃はひょっとしたらー発達障害の学生への支援1ー」を開催した。中村学長も参加される中、大井学教授（学校教育系・障害児教育講座）のご報告にもとづき、出席者による意見交換が活発に行われた。発達障害についての正確なイメージをつかむ上で有益であったと思われる。

発達障害の学生への支援について、当センター教育支援システム研究部門では、共同学習会において継続してとりあげる予定である。以下に企画意図を示しておく。

日本学生支援機構の調査（『大学・短期大学・高等専門学校における障害学生の修学支援に関する実態調査結果報告書』平成20年6月）によれば、全国の高等教育機関1230校（うち4年制大学は754）に在籍する、発達障害（LD＝学習障害、ADHD＝注意欠陥/多動性障害、高機能自閉症等（アスペルガー症候群を含む）で、医師の診断書がある（「診断書はないが疑われる」「本人は発達障害と言っているが診断書はない」を除く）学生は、178名（前年調査結果では127名）であった。うちわけでは高機能自閉症等の学生が最も多く、133名となっている。全国98高等教育機関に在籍し、その数は、前年の73校と比べ増えている。4年制大学だけに限定すると、発達障害学生が1人でも在籍する学校数は、76（前年59）であり、ほぼ1割の大学に発達障害の学生がいることになる。

これら178名の発達障害の学生のうち、「学校に支援の申し出があり、それに対して学校が何らかの支援を行っている」学生は、91名（前年46名）であった。支援は具体的には、ノートテイク、試験時間延長・別室受験、解答方法配慮、注意事項等文書伝達、使用教室配慮、実技・実習配慮、教室内座席配慮、専用机・イス・スペース確保、チューター、またはティーチング・アシスタントの活用となっている。

上記データは医師の診断書がある場合だけである。自らがそうした認識のないままに大学生生活を始めている例は、把握されていない。教員が日頃経験する、授業を行う上で配慮が必要と思われる学生の中で、診断を受ければ発達障害とされる例もあると想像される。他の障害では、本人が自覚しており、本人（や親）からの申し出により、ある程度定型化された支援が始まることが多い。これに対して、自覚のない場合も含め、千差万別の対応をしなければならないのが、発達障害の学生の特徴ともいえる。共同学習会のタイトルに「困った学生」というアバウトな表現を使ったのは、こうしたことを背景としている。発達障害という言葉をもっとくると、教職員の方々に、自分が教えている、あるいは、自分が窓口で対応している学生のことでないと受け取られるおそれがあると考えたから

である。

こうした趣旨をご理解いただき、今後開催する、発達障害に関する共同学習会のシリーズへの参加を強くお願いしたい。
(文責：教育支援システム研究部門教授 青野 透)

○●○ 学士力についての学生の自己評価－2009年1月実施学生アンケート結果より－

【大学教育開発・支援センター実施アンケート結果報告 その2】○●○

前回に引き続き、本年1月実施「学習状況と学習成果に関する学生アンケート」結果の紹介である。今回は、学士力についての設問に対する、学類1年生の回答データである。

「昨年12月中央教育審議会は『学士課程教育の構築に向けて』答申を文部科学大臣に提出しました。そこで示されたのが、「各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～」です。専門分野の違いを超えて、大学卒業にふさわしい能力を大項目（4）小項目（13）に分けての具体的提示です。当てはまるものを選んでください。」という設問であった。

全13の項目の中で、学生たちが今の時点で最も身につけていると答えた学士力が、「倫理観（自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる）」である。すなわち、

自分には倫理観は	十分身に付いている	53
	だいたい身に付いている	150
	あまり身に付いていない	46
	全く身に付いていない	7

次に比較的高い評価となったのが「自己管理力（自らを律して行動できる）」である。

自分には自己管理力は	十分身に付いている	38
	だいたい身に付いている	114
	あまり身に付いていない	86
	全く身に付いていない	18

この2項目を含めて、大項目のうち「3. 態度・志向性」についての学生たちの自己評価は、私などが想定していたほど低くはない。

これに対して、大項目のうち、「2. 汎用的技能（知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能）」の自己評価はかなり低い。

特に、「数量的スキル（自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる）」についての苦手意識は顕著である。すなわち、

自分には数量的スキルは	十分身に付いている	7
	だいたい身に付いている	75
	あまり身に付いていない	140
	全く身に付いていない	37

大項目「4. 統合的な学習経験と創造的思考力（これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力）」についての自己評価が同様に低い、1年生であることから当然とも言える。

アンケート結果により、いわゆる学士力を4年間あるいは6年間にわたる教育で高めるためには、本学の学生に対しては特に、汎用的技能を十分に身につけることを意識した、カリキュラム改善・授業改善に取り組むべきことが示唆されたと思われる。

(文責：教育支援システム研究部門教授 青野 透)